第8回国際日本文学研究集会公開講演（1984．11）

ヲカシの系譜

The Genealogy of *Okashi*

阪　倉　篤　義*

Currently available dictionaries of pre-modern Japanese (*kogojiten*) tend to be biased towards representing the lexicon of classical literary texts. For example, entries under the word *okashi* in such dictionaries, with one or two exceptions, give, first of all, definitions such as (1) interesting, (2) tasteful or suggestive, (3) superior, or (4) lovely, and only supply in last place the definition (5) comical or funny. In some cases this last definition is omitted altogether.

In the literature of the Heian court, especially the *Makuranososhi*, noted for its thematization of *okashi*, the value of *okashi*, together with *aware*, occupies a dominant position, and in the case of this literature, it is indeed true that *okashi* can be understood, as a rule, within the compass of definitions (1) through (4) offered above. This usage of *okashi* remains, however, a distinctive feature of classical narrative literature of genres such as the *nikki* (diary) or *monogatari* (tale, recit). For other narrative genres, eg. *setsuwa* (fables, anecdotal tales), definitions (1) through (4) of *okashi* are often inapplicable. Of the 94 instances of *okashi* in the *Konjakumonogatari*, (a *setsuwa-shu*) for example,

* SAKAKURA, Atsuyoshi 甲南女子大学教授、京都大学名誉教授

as many as 42 call for the 5th definition above. (Such examples are especially frequent in books 24 and 28 of that work.)

The infrequent appearance of *okashi* with sense (5) in Heian *nikki* snd *monogatari* is attributable to the subject matter of these genres. In texts of the medieval period and after, although *okashi* appears in sense (1) through (4) in the archaistic prose of the *Tsurezuregusa* and other texts, as an instance of *bungo* (the "literary style"), such occurences elsewhere are rare, and in general, *okashi*, in this period and after, always has sense (5), "laugh-provoking" or "odd".

In short, the word *okashi* has been used consistently with the senses of "laugh-provoking", "strange" ever since it was defined in the early Heian lexicon *Shinsenjikyo* as "*waraubeshi anaokashi,*" and these are its original senses. The use of *okashi* in other senses in Heian literature represents a temporary expansion of the meaning of the term in literary language.

If editors of dictionaries of pre-modern Japanese intend to present faithfully the lexico-historical realities, they will have to make a departure from the tradition, which dates back to the Edo period, of inflating the importance of classical literary texts.

私は先程御紹介いただきましたように国語学をやっております人間で、いわゆる文学的なお話しは不向きでございますが、私の考え方としては、言葉というものを追及していけば、結局は文学の問題にも関わることになると思っております。そういう考え方で今日はヲカシという言葉を追求いたしてみたいと思います。直接の問題として、皆様方も御利用になる「古語辞典」というものが、どうももう一つ充分でないような気がいたします。それなら

おまえが作っている辞典はどうなんだと言われると大変忸怩たるものがございまして、それぞれの言葉についてよほどよく調べないと、本当の古語辞典などというものは作れるものじゃないということを痛感いたしております。そういう懺悔みたいなことを申し上げたいと思うわけでございます。

「古語辞典」というものは、特に古典を研究いたします場合に非常に便利なものですが、いわゆる古典文学だけではなくて、明治の文語文体で書かれた小説についても役に立ちます。しかし、現行の古語辞典には、少々妙なところがございまして、現代語にある言葉は、いくら古典に出ていても、これは掲載しない。山とか川とか犬とかいう基礎的な言葉は、現代語と同じだから古語辞典には出しません。また、今行われている意味と昔行われていた意味が違うという語の場合に、昔あった意味だけを書いて、今行われている意味は書かない。そうしますと、なにか、今行われている意味は昔はなかったみたいになるのですけれども、実は今と同じ意味で昔も行われていた場合がたくさんあることは、申すまでもありません。日本人の場合にはそれでもある程度想像がつきますけれども、外国の研究者などの場合には、古語辞典に載っていないからそういう意味は古代ないしは中世までずっと行われていなかったのだ、というふうに誤解なさる場合もあるかもしれません。そういう事に多少関係いたしますのが、今日申し上げますこのヲカシという語の場合でございます。

「古語辞典」と称するものは現在随分たくさんの種類が出ておりますけれども、もともと学生が古典を勉強いたします時に役立つようにといった意図で作られまして、(最近はだんだん大きい物がでましたけれども)以前は極く小型の辞典が普通でありました。そういう学習参考書的な色彩が強かったので、教科書に採られているような古文の用語の解釈が中心になり、中世とか近世とかの、あまり教科書に採られないような作品の用法・用例などは、非常に軽く扱われるということにならざるを得なかったようであります。

例えばヲカシという言葉でありますけれども、お手元にお配りいたしました資料で御覧いただきますと、まず古語辞典として一般的によく使われてお

ります『新明解古語辞典』でありますが、（資料省略）それによると、ヲカシという言葉の意味が五つ挙げられていまして、①が「おもしろい・興味がある」②が「趣がある・風流だ」③が「すぐれている・上品だ」④が「美しい」そして⑤に「滑稽だ・変だ」となっております。これはまだ⑤として「滑稽だ・変だ」と出ているだけましでございまして、これを全然出さないで、①～④の意味しか書かない古語辞典もございます。次にこれと並んでよく行われております『岩波古語辞典』、これはヲカシという項目が随分詳しいのでありますが、それを見ますと、最初に一般的な説明、語源的な説明などがあってから①として「招き寄せたい、喜んで迎え入れたい」という、他の古語辞典にはない解釈が出ております。ついで、②として「興味がひかれる・面白い」③に「美しくて心がひかれる・魅力がある」④に「可愛らしい」、⑤として「すばらしい趣がある」といずれもよく似た意味ですが、細かく分けてあります。そして⑥に「面白くてつい笑いがこぼれる感じだ」という解釈がありまして、そして⑦に「笑うべきである・変っている・変だ」という解釈がついております。①から⑦までありまして随分詳しいわけでありますが、最初の「招き寄せたい」というところから意味が次第に変化してきて、⑥の「面白くてつい笑いがこぼれる」というのが繋ぎになりまして⑦の「笑うべきである」という意味が出てくるという説明のしかたのようであります。ところが、『新明解』にいたしましても『岩波』にいたしましても、最初に三つ四つ並んでおります意味は、「興味がある」とか「趣がある」とか「美しい」とかいずれも賞美する意味、どちらかといえば肯定的意味だといってよろしいかと思います。それに対して、『新明解』ならば⑤、『岩波』の方ならば⑦の意味は、否定的なあまり感心しない意味であります。この否定的な意味と、肯定的な意味とが一体どんなふうに繋がるのかというところが、これらの辞典を引いた人には理解しにくいのではないかと思います。それで『岩波』は⑥でもってその繋ぎがしてあるということのようです。

現在行われております「古語辞典」の中にも、一つ二つ、これと語釈の順序の違うものがあります。最初に、①「滑稽である」という否定的な意味を

出して、そして二番目に②「趣がある」という肯定的な意味を出し、そして三番目にまた否定的な③「訝しい」「変である」というふうな意味を出しているのがあります。これは比較的最近に出た小学館の『古語辞典』ですが、この場合には今申したように、まず否定的な意味を出しております。しかし、こういうのはほんの一、二で、大抵は先のように賞美する意味を幾つも並べて、最後に否定的な意味をつけ加えております。最後につけるというのは、つまり、「滑稽だ」とか「変だ」とかいうふうな意味は、今でも「おかしい」という言葉が行われていて、誰だって分かる。だから出す必要はないのだけれども、念の為に古代語にもあったという意味で最後につけ加えて出しておくという事なのかと思われます。

こういうことになるのには、大きな理由があります。ヲカシという言葉は日本文学にとって非常に大切な言葉で、ヲカシという言葉の、殊に賞美する方の意味を知らないと古い日本文学は本当に理解できない、という面があります。それで肯定的な方の意味が非常に重視されるということになる。しかも、その意味は現在使われている「おかしい」という言葉とは反対のような意味になりますから、古文を勉強する場合には是非承知しておかなければならないという意味で、そういう賞美するという場合の意味を、古語辞典は幾つにも分けて詳しく説くことになるのだと思われます。

ヲカシという言葉が日本の古典文学では非常に大切な意味を持っているということを、数の上で見ますと、資料1のようになっています。

資料1「をかし」、「あはれの用例数」

作　品	竹取	伊勢	土佐	蜻蛉	源氏	紫日記	枕	和泉	更級	大鏡	讃岐	徒然
をかし	1	2	2	44	534	46	422	18	26	26	3	40
あはれ	4	11		99	944	15	87	39	44	66	28	30

ヲカシという言葉の出現数は、『源氏物語』で534回、ついで『枕草子』では422回で、一つの作品の中にこれだけヲカシという言葉が使われています。それだけではなくて、『竹取物語』に始まって、中世文学の『徒然草』に至る

までこんなにたくさん使われているところから見ても、たしかにヲカシという語は日本文学にとって非常に大切な言葉であるということが言えると思います。これとよく並んで言われますのが、アハレという語で、これも、上に出しましたように、『土佐日記』には見えないけれど、その他の作品の中に何れもおびただしい数出てまいります。特に『源氏物語』には、実に944回、アハレという語が使われております。尤も、これは、感動詞のアハレが一緒になっておりますので余計数が多いのでありますけれども、とにかくその他の作品を見ましてもアハレという語が、ざっとヲカシの二倍を更に上回るほど使われております。

このアハレとヲカシという語は、御承知のように、よく対比されまして、日本文学の美的理念を表わす代表的な語として問題にされます。いろいろな人の考察がございますけれども、一番要領よく説明されているのが、岡崎義恵博士の「をかしの考察」という論文です。中心的な部分を引用いたしますと、

「をかし」はあくまでも外からの賞美であり、「あはれ」は或程度まで内へ入って行ふ内部からの賞美である。「あはれ」が対象と自己との距離をあいまいにし、主客合体のごとき朦朧たる意識の中で融けて自己愛憐の情に似た感傷的状態を呈するに反し、「をかし」はあくまで対象を外から見、自己を立て通すことによって対象の好適たる事を意識せんとするのである。この意味では「あはれ」は女性的であり、「をかし」は男性的であるといってよかろう。

というふうに言われておりますが、要するに観照する、こちらから眺めるという態度で、そういう立場からの評価、これが「をかし」であって、従って、ある明るさがあると、岡崎さんは言っておられます。大体どの人の論を見ても、「をかし」という言葉の内容はそんなふうに理解されているようであります。吉沢義則博士の『源語釈泉』にも、

「をかし」の直意は「興味を引く」である。それが前後の文勢によって、それぞれに適切な飜意に譯される。・・・・・「なまめかし」を陰の興味と

言ったらば、「をかし」は陽の興味を表はす言葉であらう。「なまめかし」を秋の導く興味と言ったらば、「をかし」は「可笑」の義まで展開した言葉である。

と言われております。ヲカシという語を「可笑」あるいは「可咲」と書くことは、『新撰字鏡』に「可咲　見醜貌面咲貌　阿奈乎加志（あなをかし）」と見えて以来、ずっと後まで行われます。「咲」は日本では「さく」というふうに訓読いたしますけれども、笑うという意味で「可咲」は文字通り laughable の意味であります。

ヲカシが陽の興味を表わすというのはその通りだと思いますが、その後に述べられていることは、はたしてそうであろうか、というのが私の疑問であります。つまり、「可咲」という意味は、はたして、「賞美すべきだ」という肯定的な意味から展開していった意味なのだろうかということ、それを考えてみたいと思うわけであります。先程申しましたように、ヲカシという言葉は日本文学にとって極めて重要であります。資料１の表のように、『竹取物語』に始まって『徒然草』に至る諸作品に非常に屢々使われており、そして、そこに表われている意味は、確かに、賞美する意味が主であります。けれどもそれなら『源氏物語』などに否定的な意味のヲカシはないかというと、そんなことはないので、534回の中の10回程でありますけれども「可咲」の意味でも使われております。ですからそれを古語辞典には出さないではおけないはずであります。むろん、その他の古典においてもヲカシという言葉はやはり可咲の意味に使われたり、或いは不審の意味に使われたりいたします。ただ、特徴的に多いのが賞美する意味のヲカシであるというので、この言葉が日本文学の大変大切な用語であるということになるわけであります。しかし、日本文学の歴史の中で平安文学だけが日本文学ではないわけで、これが一つの中心であるということは変わりありませんけれども、中世の文学、近世の文学、先程ヒベット先生のお話しがあったような江戸後期の文学までが、俗に広い意味で言う日本の古典文学であるわけですから、その用語を解説する古語辞典は、それらを通じて使われているヲカシという語の意味を正確に記述

しなければならないはずであります。

一つの試みとして平安末期の説話集『今昔物語集』の中にヲカシという語がどんなふうに使われているかを調べたのが、資料2であります。

資料2『今昔物語集』の「をかし」・「あはれ」

巻	一	二	三	四	五	六	七	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一九	二〇
をかし	・	1	1								1	2				1	6	
あはれ	2	2	1	1	5	1	1	3	4	1	10	8	10	11	24	5	45	11

巻	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	総計
をかし	4	2	22	1	4	3	33	2	10	1	94
あはれ	8		23	3	15	9	2	10	24	6	245

『今昔物語集』は御承知のように内容が巻によって分かれます。第一巻から第五巻までは天竺すなわちインドの話、第六巻から第十巻まで（八巻が抜けますけれども）は震旦すなわち中国の話、その後が本朝すなわち日本の話。日本の中でも二十巻までの部分は仏教関係の話、二十二巻以下になりますと世俗の話になります。ちょうどそれに合致するようにヲカシという言葉は、巻二や巻三に1つずつしか出てまいりません。巻十二、十三、十七にも1つ2つしか出てまいりません。ところが文体まで変わるといわれております巻二十二以下の日本の、仏教関係以外の説話を集めた部分になりますと、俄然このヲカシという言葉が出だしまして、巻二十四には22回、二十八にいたっては33回、というふうに非常に集中的に現われます。同じ『今昔物語集』の中でも、説話の内容によって、こんなにヲカシという言葉の現れ方が違うということであります。ついでにアハレの方をみますと、この方はほとんど平均してずっと現われますけれども、やはり後の方の巻十六あたりから以後になって非常によく出てまいります。これは当然の事なのでありまして、物語なり説話なりの内容によって当然、語の現れ方は違うはずであります。巻二十以前のインドの話、中国の話、これ等は主として仏教関係の話であります、

そして日本の話でも仏教的な話には、ヲカシという言葉は極めて少ない。それが、巻二十二以降になると、例えば巻二十四というのは、本朝の世俗部つまり世間で行われている話を集めた巻で、主として芸能に関する話であるとか、ある技芸を持った人の話だとか、そんなものを集めています。それから巻二十八というのは、これは町の中で行われている世間話的なものを集めています。また、これらに次いでヲカシが多い巻三十というのは歌物語的なものを集めております。そうした巻々にヲカシという話が集中して現われるというわけであります。ちょっと断わっておきますが、これらの数を単純に比較してはいけないのでして、『今昔物語集』は巻によって非常に大きさが違います。巻二十四とか巻二十八とかは大変ボリュームの多い巻であります。その他、巻十九、巻十六、巻九、巻二などはすべて相当ボリュームの多い巻でありますので、従って巻二十四とか巻二十八は一層ヲカシの出現数が大きいということになります。けれどもボリュームが多ければ必ずヲカシの出現数が高いかというと、巻十六、巻九、巻二などには全然出てこない。逆に巻三十などは小さい巻だが10も出てきます。ですから、もちろんボリュームだけの問題ではないわけで、ボリュームのことも考慮しなければならないけれども、やはりこれは、内容によってヲカシという言葉の現われ方に非常に違いがあるということであります。そうしますと、平安文学の日記・物語などにヲカシという語が非常によく出てくるのも、つまりは内容によるのではないかということです。語られている内容がヲカシという言葉を非常に要求する内容を持っているからだと考えられます。『今昔物語集』の場合は、現われ方がこのようにちぐはぐになっておりまして、そして、全部で94回出てまいりますが、その中には勿論、先程申しました賞美する意味のヲカシもございます。例えば女性の美しいことをいったり、子供が可愛いことをいったり、丁度『枕草子』と同じ様な使い方のヲカシです。そしてその他に、立派だとか結構だとか趣があるだとかに言い換えられるヲカシが、合計いたしますと30位あります。そういうものも勿論ございますけれども、94例の中の42例までは全部「可咲」の意味であります。「笑いたくなる」とか「変だ」とか「不審

だ」とか、「可咲」の内容は更に分けられますけれども、要するに否定的なヲカシです。そういたしますと、例えばこの『今昔物語集』などを余り重視しないものだから、ヲカシという語の中心の意味は賞美である、ということになるのでありますが、同じ平安文学でもジャンルの違う『今昔物語集』のようなものを考慮にいれますと、決してそうはいえないことになります。

それならば『今昔物語集』など説話集が特殊だからそうなるのではないかと思われるかもしれませんが、実はヲカシが「可咲」の意味に用いられるという傾向は中世になりますといよいよ強くなりまして、『平家物語』などにはヲカシという言葉が三度だけ出てまいりますが、その意味は全部「可咲」の方でして、古語辞典に強調されているようなヲカシの賞美するような意味は、『平家物語』では一つも使われておりません。では中世の文学である『徒然草』に40例もあって、しかもその40例は賞美する意味のものが非常に多いのはどうなのかとおっしゃるかもしれませんが、これは、御承知のように『徒然草』というのは一種の擬古文体を使って文章を書いているからであります。そういう場合にはヲカシという語も、その文体のモデルになった平安時代中期の文章に行われてきたような形で使われることになります。それはしかし中世ではむしろ特殊な使い方であると言わなければなりません。同じように例えば謡曲の文章とか世阿彌の『花伝書』の文章とか、そんなものには伝統的な古い意味でヲカシを使う例はあります。しかし、その時代の言葉として考えるならば、むしろキリシタン資料などに使われているのが中世のヲカシという語の意味であると考えなければなりません。そこで、例えば『日葡辞書』ではどうかといいますと、"vocaxij" という語については「笑うべき（こと)、又は、馬鹿げている（こと)」という説明しかありません。古語辞典で強調するような賞美する意味は全然書いてありません。つまり「可咲」というのが、中世のヲカシの普通の意味であったわけです。狂言などでもやはり、「おかしいことを言う」「おかしいものがある」などと、「笑うべきだ」とか「変だ」とか「不審だ」とかいう意味にばかり使われております。ただ、一つ疑問なのは「腹不立」という狂言（虎明本）に、

此のほどおかしい小庵をむすんでござるが・・・

というのがあります。この「おかしい」は、ちょっと見ると「風流な」という意味のようにみえるのですけれども、この狂言は、自分で庵を作って、そこに住む坊さんを探しに行く話でありまして、この「おかしい小庵」というのは、愚息だとか荊妻だとかいう言い方と同じように、自分の庵を卑下して「おかしい」と言っているのだろうと思います。従ってこれも否定的な意味のヲカシと考えていいのではないかと思うわけです。また天草本の『平家物語』に、

Feiqe ua Mizzuximano icusa ni catte coso majeno fagiuo susugarete gozare: sanai naraba *vocaxij* coto de gazaro.（巻第三第十二）

とありますが、この「vocaxij」という語も肯定的な意味ではなさそうです。つまり水嶋の戦に勝ったから平家の面目が保たれたので、もしも水嶋の戦に勝たなかったならば、おかしいことでござろう、というのは、「不都合な、或いは具合の悪いことになったであろう」というふうな意味だろうと思うのです。ですからこれもやはり否定的な意味のヲカシだと思います。次のは、虎明の書いた『わらんべ草』でありますが、

おかしきと面白きとは、おかしきより面白き方勝るべし

これなども、「おかしい」と「面白い」とを対比しておりますのは、明らかに「滑稽」の方のおかしだと思います。江戸文学になっても、ヲカシは普通「可咲」の意味で用いられます。その例はあげると切りがないわけでありますので、むしろそうでないものを探しますと、例えば『奥の細道』に、

等栽も共に送らんと裾おかしうからげて

とあります。これも勿論、ちょっと風流な裾のからげ方をしているという意味にもとれますが、見たところがちょっとしゃれて面白い、そういう裾のからげ方をしていることを言っているのであります。西鶴などがヲカシという言葉を使います場合、次のは『好色五人女』でありますけれども、

此ゆふぐれは、なき人の来る玉まつる業とて鼠尾草（みそはぎ）折しきて瓜なすびおかしげに大豆かれがれに（巻五）

これはお精霊様、魂祭りをしている時の飾りを述べているのでありますが、この場合、明らかに肯定的な意味の「おかしげ」と考えなければなりません。けれども、これは、『徒然草』などを通じて、もう一つ前の時代の伝統的な表現を用いていると考えるべきで、決して江戸時代の一般のヲカシの使い方をしているわけではないと考えなければならないと思われます。つまり、一般的に申しまして、特に古典的な用語の使い方をする場合はありますけれども、それは例外というべきものであって、ほぼ平安時代の終わり院政時代にはいるかはいらないかというところまでがヲカシという語の賞美する意味の全盛時代であって、それが過ぎますと、ヲカシという語は現在使われておりますのと同様な、むしろ否定的な意味が一般的になると言えると思います。

この事実を、古語辞典は、どうも正確に反映していない。最後にちょっと「可咲」の意味をつけ加える程度の説明しかしないのは、おかしいのではないか—それこそおかしいのではないかと思うのです。これでは古典文学全体を通じてのヲカシという語の説明にはなっていないわけで、賞美する意味を四つにも五つにも分けて詳しく説明するのと、どうも不均衡な感がいたします。

結局私の言いたいことは、ヲカシという語は、先程申しました『新撰字鏡』(九世紀末成立)に出ております「可咲」の意味が一貫して今日まで使われているのであって、これがヲカシという語の一番根本の意味であるし、そしてそれはまたずっと今日まで少くとも千年の間変わらずに使われていたということであります。その中で、古語辞典が強調いたします「興味がひかれる」だの「美しい」だの「趣がある」だのという意味は、ちょっと言い方が極端かもしれませんけれども、日本文学全体の流れの中で見れば、ある一時代の文学方言のようなものであって、日記物語というジャンルの中で特にヲカシという語の意味が少し拡張されて用いられたに過ぎない。しかもそれは日記物語などの散文学用語に限られたことであって、同じ平安時代の文学でも、和歌にはヲカシは(肯定的な意味でも)使われません。詞書には出てまいりますけれども、八代集や二十一代集などの代表的な平安時代の和歌集には一度もヲカシという言葉は使われておりません(これについては、根来司氏の

論文があります)。つまりヲカシは、日記物語などの散文学が特に愛用した言葉ということになりますが、その日記・物語というものが余りにも重視されすぎて、日本文学の代表といえば平安文学、特に日記・物語であるように考えられた時代があって、従ってそこに使われているヲカシという語の意味が大変重要視される結果になってしまったのではないかと思います。重ねて申しますが、結局ヲカシという語の中心の、古代から今日まで続いております意味は、笑いを誘われる、或いは滑稽であるという意味だったのであります。

しかし、それならば「笑いを誘われる」という意味がどうして賞美するというふうな意味に転じていったのかということでありますが、『今昔物語集』に「ものをかしくいひて人笑はする」人物というのがよく出てまいります。話術に長けた人物で、大変面白く話をする、それを聞くと人々は笑いを誘われる。そういう witty な話をする人がいたのであります。たとえばそういう機智のある人の話を聞くと瞬間的にパット気持ちがほぐれます、そういう解き放たれた明るい心持ちで対象をながめる気持ちがヲカシであります。そこから対象を笑う気持の余裕も生まれてまいります。それが、先程引きました岡崎さんの説明にみえる「自分を立て通して対象を見る」という態度であり、また陽性の興味であるということでもあるわけです。つまりある物を見て、それによってこちらの気持ちが解放されるような気持ちになるとき、これを「おかしい」といいます。それに対してアハレはもっと対象と一体化するといいますか、親身な見方をする態度であります。『源氏物語』は「あはれ」の文学であって『枕草子』は「をかし」の文学であるということをよく申しますが、清少納言はいろいろなものを観察してそこに美を見い出し、その感想をヲカシという語で表現するわけであります。『源氏物語』の方は物語でありまして、こちらはヲカシではなくて、むしろアハレという立場で物を見ております。それでは紫式部という作家は常にアハレというものの見方をしているかと申しますと、資料1の表で見ますように、『源氏物語』ではアハレという語を、ヲカシの倍とは申しませんけれども、圧倒的に多数使っておりますが、同じ作家が『紫式部日記』を書きますと、今度はヲカシという言葉をアハレ

の倍以上使っております。つまり、「日記」という観察的な立場で文章を書きますと、同じ紫式部でもヲカシという見方になるわけです。そういう観照する見方がヲカシという語の根本にあって、それが賞味するという肯定的な意味に使われた場合と「可咲」という否定的に使われた場合と、二つに分かれてくるわけであります。ですからヲカシという語は先程申しましたように「疑わしい」の意味にも使われます。「疑わしい」ということは、つまり自分の立場が確立していて、そこから対象を客観的・批判的に眺めて、変なのではないか、正当でないのではないか、とする態度であります。ベルクソンを持ち出すまでもなく、「笑い」というのは、優越感から生れてまいります。こちらが上位に立って、相手を見下す所から、笑いというものは出てきます。そして、対象の実体が暴露されて、その価値が下落した瞬間に、笑いというものは起こります。「笑い」は本質的にじめじめした感傷とは無縁のものであります。

そう考えました時に、(私は今日そういうことを申し上げるのが本意ではございませんけれども)『岩波古語辞典』の最初に出ておりますヲカシの解説は、ちょっと納得がいかないのであります。ヲカシがヲク(招く)という言葉からきているという説明ですが、「招き寄せたい」という気持ちは、自分の方に引寄せたい、自分の中に取り込みたいという気持ちですから、相手に対して優越感を持つ気持ちから生れてくる「笑い」には相応しないと思うのです。自分が対象と一体化したいという気持ちから出てくる美の意識は、むしろアハレの方でありまして、相手に対して「変だ」と批判したり或いは「滑稽だ」と見下したりするような意味は、出てこないと思います。つまり『岩波』が⑥でもって、①〜⑤の賞美的な意味を⑦の「笑うべきである」という意味に繋いでおりますが、この繋ぎ方はちょっと無理じゃないかと、私は思うのです。けれどもヲクという言葉からヲカシを説明する考え方は肯定していいのではないかと、私も思います。これは山崎馨さんがお書きになった論文(「美夫君志」6号所収)に基づいているのだと想像しますけれども、山崎馨さんがお書きになる以前にもこの考え方を述べた人(例えば「国学院雑誌」

昭35年6月号所載の小金丸研一氏の論文参照）もおられますが、根本は折口信夫先生の考え方に発すると思います。つまり神を招くワザヲキのしぐさ、神を招く時に可咲なことをして神の気持ちを和めてその場に降臨を願う、それがヲク（招）という行為であります。それを端的に物語りますのが、天宇受売命が天の岩戸の前で神々の笑いをさそうような踊りをやり、それにさそわらて天照大神が出てきたという神話であります。つまりそういう非常に滑稽な、ヲコな行動に対して懐く感情がヲカシであります。ヲカシという語は明らかにヲコという語と結び付くはずであります。例えば裸になって踊りをするなど、自分をわざと卑下して、見る人に優越感を持たせ、その笑いを誘う、そういう気持ちにさせることによって相手の気持ちを和めるというのが、ヲコなる行為をすることの意味であります。

延年という能以前の芸能がございますが、その延年の「大風流」「小風流」というものにヲコツリという役がございまして、これは主人公、主役を誘い出す役でありますが、そのヲコツリという語はヲコツルという動詞から出来た言葉で、これは相手の気持ちをなだめすかす、或いは機嫌を取る、古くは「こしらえる」などという言い方もありましたが、そういうことをすることがヲコツル（誘る）であります。主役をヲコツって誘い出す役をするのがヲコツリでありますが、このヲコツルというのは明らかに「繰る」などの「つる」という接尾語がヲコという言葉に付いて出来た語であります。そういうヲコツルような動作をするさまがヲカシであって、それが笑いを誘うのであります。あくまでこちらを低くして相手に優越感を持たせて相手の笑いを誘って、そして結局は自分の思う通りにするわけですけれども、ヲカシと感じる側から言えば意外性といいますか、そういうものによってふっと気持ちが和む、そういう時に感じる感情であります。『枕草子』には何度もヲカシという言葉を使ってありますけれども、

ぬかつき虫またあはれなり・・・思もかけず暗き所などにほとめきありきたるこそをかしけれ（四三段）

とあります。糠搗虫、米搗虫とも申しますが、体を屈折してピーンと跳ね上

る虫がございます。その虫そのものは「あはれ」であるというふうに言っております。しかしその虫が暗い所でポコンポコンという音をさせながら自分でひっくり返って跳ね起きようとしている音を突然に思いもかけず聞いたときに、「おかしい」と感じる。つまり瞬間的に意外な感じでもってある笑いを誘われる様な気持ちになった時にふと、「面白いな」と思う、それがヲカシという感情であります。それはいろいろな言い換えが出来るわけで、「かわいいなぁ」と言っても「面白いなぁ」と言ってもよろしいのですが、そういう文脈による言い換えは第二の問題でありまして、ヲカシという語が根本的に持っている意味は何かということ、それを正確に理解させるのが古語辞典の役目ではないかと思います。つまりヲカシという言葉が「可咲」という意味を根本に持っているのだということを知った上でこの賞美する意味のヲカシという言葉を眺めたときに、本当にヲカシの意味が分かるのであって、これをアハレと区別が着かないような言い変えをしただけでは、結局アハレとヲカシとはどこが違うのか精確には分からないということになると思います。そういう意味で語の歴史—語史というものを正確に記述すること、それが結局その語の根本的な意味を正確に理解させることになるし、そしてそれはやがて「をかし」の文学、「あはれ」の文学などと言われる、文学における美的理念を正確に理解することに直接に繋がっていくのではないかと考えます。初めにもお断りいたしましたように、お前自身の『古語大辞典』を作ってから言えと言われると返す言葉がございませんが、一般に「古語辞典」には、まだいろいろ改良すべき所がいくつもあります。平安時代の文学が、近世以来、古典を学ぶ場合の中心となりまして、古典と言えば平安文学、平安文学の中でも物語・日記を特に重視いたしますために、古語辞典なども、ついそこで行われる用例が全てであるかの如くに説明してしまいます。けれども今や日本文学の研究は、中世の文学、近世の文学、近代の文学と、それぞれの時代がかつての平安時代の文学と同じくらい詳しく研究されているわけでありますから、その中世の用法、近世の用法を無視して古語辞典を作ってはいけないはずで、古語辞典は全ての時代の語の意味を正確に反映するものでな

くてはならないのです。それは理想論であってなかなか難しいかもしれませんが、少くともそういう古語辞典を作る必要があるのではないかということを自らの戒めとして、お話し申したしだいであります。